

END BLACK

ワークス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人が見る“夢”を利用し異世界へと渡る技術が確立した世界。

人々の裏と表を見ながら日々は過ぎていく。

そんな中で生きている毎日。

少年・黒川伸彦はある日、謎の異世界に飛ばされる。

伸彦は仲間と共に名を変え、その世界から還る方法を探すことに。

その中で出会った人々との関わりが、少しずつ伸彦たちを変えていく。

伸彦——クロウの物語は、少しずつ動き始めた。

※本作はオリジナルです。

投稿間隔は長くなりそうですが、気長に見てください。
感想、誤字脱字などの報告お願いします。

目次

プロローグ The first a	1
序章 魔法士と演武編	
episode. 1 夢を渡る世界	7
episode. 2 異界の地	20
episode. 3 魔法士	42
episode. 4 昇級演武開始	
episode. 5 黒髪の少女	57
episode. 6 指揮者	69
episode. 7 妖狐使い	104
	87

プロローグ～The first action

叫び声が響く。

絶叫とも言える叫びが。

辺りを緋く染め上げる。

「諦めるな！ まだ希望はある！」

突如として響く一つの声。

それは汚れた地に降り注ぐ光のようで。

相対するものへの死の宣告。

「大切なものを守るために戦うんだ」

辺りは黒く染まる。

嫌いだ。

少年の頭に浮かぶ言葉はそればかり。

周りにあるもの、いる人、風を切る飛行機や地を駆ける車も。

みんなみんな、嫌いだ。

執拗に軽蔑と畏怖の感情を撒き散らす同級生も。

へらへらとした顔で頭を下げる偉い役人や研究者も。

「みんな……大っ嫌いだ」

少年には、全てが異物に見えた。

こんな世界に希望なんてない。

自分と目先の利益だけを求めて、誰かの利益は無視する。

世界は反映する一方、歪な心を持つものが現れ、次第に世界を蝕んでゆく。

そんな世界。

希望なんて……ない。

だけど。

「どうしたー？ 朝から暗い顔してさ」

「…何でもないよ」

「何でもないなら、ほら笑う！」

そう言つて、いきなり現れた少女が少年の頬を引っ張る。びろーんと面白いように伸び、少女が笑いながらそれを続ける。

「ひはいほ…」

「んー？ 何だつてー？」

「…だから、痛いって」

やけにないながら少女の手を引き剥がす。

すんなりと離してくれたので大事には至らず、しかしまだ微かにヒリヒリする頬を摩った。

「笑わないのが駄目なんだよ。人生つまんなくても、笑ってれば何とか成るのさ！」

「……それ極論」

握り拳を作りながら言う少女に対して、少年はきつぱりと言い放つ。

少女は肩を落としながら、むうっとした顔で少年を睨む。

「そんなこと言わないでよ。要は、気持ちの問題」

「だって事実だし」

「全くもう……でもわたしは、自論を曲げる気はないよ」

真つ直ぐに少年を見つめる少女。

その目を受けて少し顔を逸らせ、仄かの頬を赤らめながら、小さく呟く。

「……でも、利香はそれでいいと思うよ」

少年は目線を戻さず、でも思ったことをそのまま言う。

それが分かっている少女——松嶋利香は、にっこりと微笑みながら。

「ノブも、そうなれたらいいね。わたしは、ずっとノブの友達だから！」

僕は、周りの人を信じられない。

親も、友達も、動物も、ものも。

何もかも。

僕のせいで全て変わってしまったから。

でも、あの人たちは違う。

日本のとある街の片隅で。

そんな二人の会話が通学路に響いていた。

何の変哲もない、でも少しだけ違った空気を纏った会話。

風が吹き抜け、二人の髪を揺らす。

少年——黒川伸彦の物語が、静かに始まろうとしていた。

序章 魔法士と演武編

episode. 1 夢を渡る世界

2051年、日本。

全ての水準が向上する中、最も科学が発展した、そんな時代。

かつては叶わなかったことも叶うようになった。

そんな時代に、一つの旋風を巻き起こした画期的なシステムが生まれていた。

《人が見る“夢”を利用し、異世界へと渡る》。

その名も、《ドリームクロス》。通称DC。

まさしく《夢物語》のような出来事を人々は実現させた。

だが、それは研究者たちが発案したのではない。

発案者は、あどけなさを充分に残す通りすがりの、ごく普通の少年であった。

失礼します、とドアが開けられた。

「伸彦様、おはようございます。起床のお時間でございます」

入ってきたのは、小さく、しかしきちんと手入れされた髭をたくわえた初老の男性だった。

男性が視線を向ける先には、ベッドの淵に腰掛け、頬杖をついてブーツとじている少年。

「伸彦様」

男性が再度声を掛ける。

「……………はい」

暫く間が空いてからようやく返事が返ってきた。

「今日も良い天気ですよ。さあ、朝食の準備も出来ております。お早めに降りてきてください」

語りかける男性の目は優しさに溢れていた。

しかし、それを受ける少年の目は暗く沈んでいた。

「……………分かった、竹宮さん」

少年がポツリと呟く。

竹宮と呼ばれた男性はそれ以上何も言わず部屋を出て行った。

少年はゆっくりと起き上がった。

閉め切られたカーテンを勢いよく開け放つ。途端溢れる光に思わず目を細める。

窓の外に広がる世界は、とても輝いていた。

少年はそれを羨ましく感じていた。

「——光、か」

少年——黒川伸彦の一日はこうして始まる。

伸彦の家はとても裕福だ。

正確には、とても裕福になってしまった。

その原因は伸彦にあった。

七年前、母親とともに街を歩いていた彼は、その日見た夢の話をしていた。

それがどんな話だったかはもうあやふやになっている。

ただそれを話す伸彦は笑顔であり、母親も微笑んで聞いていた。

そして彼は話し終わり、最後にこう呟いたのだ。

『あーあ、夢がホントになったら、僕もあんな風にかっこよくなれるのになあ』

それを偶然聞いた者がいた。

それが後にドリームクロスの第一人者と呼ばれる科学者の男だった。

伸彦の呟きを耳にし、咄嗟に閃いた男は、あまりの衝撃の為に思わず伸彦の肩を掴んでいた。

君の言葉が世界を覆すかもしれない、とても素晴らしいヒントだ、そんな言葉を目を輝かせながら並べていった。

いきなり話しかけられた二人は心底驚いた。

母親は男が科学者であると分かると、途端に表情を変えた。

この子がお役に立てるのならぜひ協力したい、と伸彦に代わって受け答えを始めた。

蚊帳の外に置かれた伸彦は、ただ呆然としていた。

しかし、伸彦自身は言い表せぬ恐怖を感じていた。

獲物を前にした獣のような科学者。

獣の近くで媚びへつらう母親。

恐怖が全身を包む中、母親に訴えようとした。

しかし、気付いてくれなかった。

伸彦はその時初めて他者に対する疑心感を学んだ。

明るい笑顔に溢れていた伸彦の周りを、どす黒い何かで満たされていくような気がして。

伸彦から、信じるといふ光が段々と消えていった。

少し変わったチャイムが鳴った。

それと同時に伸彦の意識が現実に戻った。

今日の授業が終わりを告げる。

と言っても、伸彦にやることは特にない。部活も入っておらず、いわゆる帰宅部である。

寄り道をしてもいいが行く当てもなく、かと言って真つ直ぐ帰るのも何だか嫌だった。

「何考えてんの？」

そこに一人の少女が近付いてきた。

「利香…何でもない。部活？」

「まあね。今年も顧問が張り切ってるし、私も優勝したいし」

そう言つて利香はニカツと笑つた。

彼女、松嶋利香は伸彦と幼馴染で家も近所。

昔からよく一緒にいる間柄で、伸彦のことを誰よりも理解していると伸彦自身で思つている。

だからこそ、彼女にはまだ本音を出せている。

また空手部である彼女はやる気満々の顧問の元、全国レベルの実力を身に着けている。そういう意味でも頼りになる人であつた。

「暇だったら、ちよつと頼まれてくれない？」

いきなりそう持ち掛けられた。

「何を」

「これ、美希に借りてたんだけど返してきてもらえない？ わたしすぐ来いって言われてて」

そう言つて一冊のノートを差し出した。

「…明日じゃ駄目なの」

「今日返すつて言つてあるからさ、ね！」

この通り、と両手を合わせて頭を下げる。

利香はこうやつて何かと伸彦を人と関わらせようとしている。何をやつても無駄なのだが。

しかし人との約束を破るというのも後味が悪いのも確かである。

数十秒考え、苦渋の決断を下した。

「……分かった。隣のクラスの寺門さんでしょ」

「ありがとー！ じゃよろしく！」

利香は伸彦の両手にノートを押し付け、勢いよく去つていった。

その速さに呆気に取られたが、すぐ気を取り直し片付けてしまうことにした。はずだった。

「……何でこうなるかな……」

伸彦は心底ついてないというようにぼやいた。

そんな伸彦に舐めるような視線で睨みつける男子生徒たちがいた。一人が近付き更に睨んでくる。

「ああん？ 何か言ったか？」

「……ノート返したいだけなのに……」

伸彦は大きく溜め息をついた。

そこに恐怖はなかった。むしろ慣れていた。

各家庭に必ずと言うほど購入されているDCのお陰で、伸彦はお金持ちである。

当然手中に収め財源としようとする連中も現れる。幾ら時代が変わっても、そんな連中は尽きてはいなかった。

「取り敢えずさ、これぐらいくれよ」

今周りを取り囲むグループのリーダーが指を五本立てた。

それは五百円でも五千円でもなく、五万円、いやそれ以上を指していることは理解している。

「僕はそんな金持っていない」

伸彦は嫌そうな雰囲気を出して反論した。

その後に拳が飛んでくることを分かっていながら。

案の定飛んできた。

しかし届かなかった。

その拳は、乱入者の手のひらによって寸でのところで止められていたからだ。

「全く懲りねえなあ、お前ら。喧嘩なら別のところでやつてろ——殴られたくなきやな」

乱入者のひと睨みでようやく拳を下ろした。

「チツ、行くぞ」

リーダーが指示を出しすぎすぎと退散する彼らを目端で捉えながら、乱入者に向き直った。

「ありがとう、溪也」

「気にすんなって。お前も大変だな、ノブ」

ドン、と伸彦の背中を強めに叩き、溪也は笑って見せた。

利香と同じく本音を話している彼、佐久間溪也は喧嘩っ早く人情深い。

何かと絡まれる伸彦を助けて以来、お互いに気に掛け合う仲となっていた。

今では友人という言葉も使えるほどに仲良くなっている。

「あ、ノート返さないよ」

「ん？ お前が誰かに借りたのか？」

「違う、利香に押し付けられたんだ。返ってきてっつて」

伸彦は嫌そうな顔をしたが、溪也は反対に笑っていた。

「何だよそう言うことか」

「…溪也？」

「何でもねえっつて。早く行ってこいよ、待ってっつから」

「……………。分かった」

煮え切らない部分を残しつつ、伸彦は本来の目的に戻ることにした。

そんな伸彦を溪也も複雑な目で見ていた。

「……今日も変わらなかった」

夜。

ベッドに寝転がり、呟いた。

また一日が過ぎた。変わらない日々が。

伸彦が人を信じられなくなつてから、七年ほどが経つだろうか。

相変わらず、研究者たちは伸彦に会うたびにペこペこ頭を下げていく。上辺だけの言

葉を並べ作つた笑みを浮かべる。

学校では金をたかり、畏怖し、軽蔑する者もいる始末。

七年前から変わらない日常。

「……あーあ」

伸彦自身この日常に飽きていた。

逸れたいと思っている。

逃れたいのに、逃れられない。

糸にがじがらめにされているかの如く、変えることが出来ないのだ。

人を疑い、墮落した自分から、抜け出したいのに。

——人は、変わらない。

大きく反動をつけて寝返った。

ふと、その視線の先に映ったものがひとつ。

《ドリームクロス》。

特定の異世界に移動するためのカードを用いた小型の据え置き機。

——何処でもいい、どこか別の場所へ。

僕の知らない、誰かの夢見た世界へ。

気付けば手が伸びていた。

チューナーと呼ばれる本体の電源を入れ、プラグを身体へと繋げた。

セットするカードを選ぼうと手が動き、宙で止まった。

何処でもいいなら、何処にも選ばない。

カードセットを止め、“何も”差さずベッドに寝転がった。

チューナーのスタートボタンを押す。

カードをセットしていない時点で、電源を入れても『ERROR』と出るのが普通だった。

だが。

誰かの夢に導かれ、伸彦の意識は遠退いていった。

episode. 2 異界の地

「——っ、んん……」

鼻につく匂いの元が分からず、伸彦は寝返りをうった。

頬にこそばゆい感覚がふわふわと当たり、緩やかな風が全身を撫でてるのが分かる。

まるで草原に寝転がっているような——風？

伸彦の部屋のクーラーは動いていなかった。窓も開いていない。なのに風とはどういうことだ？

伸彦はようやく目を開けた。

眩しいほどに光が視界を包み、一刻目の前を遮ってしまう。

それが止むのを待って、伸彦は体を起こした。

「……………え」

そよそよと流れる風。

揺れる草花と木々の枝。

何処からか漂う花の香。

伸彦の目の前には、豊かな森が広がっていた。

「——ええええええええつ!？」

「どうなってるの…?？」

伸彦の問いに答える声はない。

辺り一面草木ばかりで人影はおろか人の気配すらなく、ただ自分のみがそこにいた。そもそも、何故森などに寝ていたのだろうか？

「確か…部屋に戻って、ベッドに転がって…」

ぶつぶつと覚えている限りのことを呟く。

「それで、チューナーを繋いで、電源を入れて…」

伸彦の言葉はそこで途切れた。

どうしてもその先が思い出せないのだ。

あり得ない。

通常ならただチューナーを付けただけでは、何も起きずエラー表示されるだけだ。しかし、今日の前に広がる光景を見てこれが現実だと認めるしかない。

このあり得ないくらいに不自然な自然が、今伸彦の前にある現実リアルなのだ。

それが何を指すのかは簡単に連想できる。

《異世界》。

チューナーを正規に繋ぐことなく、異世界に渡ってきてしまったということなのだろうか。いや、現にそうなのだろう。

しかし、カードをセットしていないのにそんなことが起こりうるのか。

「それに、元の服のままなんて」

異世界に行く際に、渡った者はその世界に合った服装へ変換されるのだが、ここではそれが無い。ベッドに倒れこんだときのワイシャツとズボン姿だった。勿論靴なんてない。

「……どうしよう」

どうしてこうなってしまったのか、どうやったらこの現実を何とか出来るのか考えて

——やめた。

伸彦にとつて、今考えだしたことは元の世界に戻りたいと思つていふことだ。何故あんな世界に戻りたいと考えたのだろうか。

常日頃、世界に辟易して生きていたというのに。

あそこは、帰るべき場所なのか。

今のこの状況を何とかしてでも帰るべきなのか。

あの家に、帰るべきなのか。

誰のために？

「——っ!？」

悶々と思考を巡らせていたとき、物音が耳に届いた。

思わずそちらを向き、慣れない様子で身構えた。

果たして現れたのは、

「ノブ？」

右側の髪を結い上げた少女に、癖の強い髪を持った少年。

「——利香、溪也」

別れて半日も経っていない友達と再会し、伸彦は今の状況を整理し始めた。

「それじゃあ、二人ともどうしてここに来たのか分からないのか？」

「うん、気がついたら草の上に寝っ転がってて、周りは森で」

「歩いてたら利香と会ってな、叫び声が聞こえたから来てみりや、お前がいたってわけ」

叫び声については追及せず、二人ともどうやってここに来たのかはやはり覚えていないようだ。

「おまけに、わたしチューナー付けてないよ？ マンガ読んでたもん」

謎だらけの上にさらに謎が増えた気がした。

「取り敢えず、ここはどっかの異世界ってことでもいいんだよな？」

「うん、それは間違いないと思う。わたし色んな世界で遊んでるから見る目はあるよ？」

こんなケースは初めてだけど」

「…信用し切れない」

「どういう意味よ!?!」

これ以上悩んでいても仕方がない。むしろここで二人に会えたことが奇跡だったと思えてきた。そんなところで、話はこれからどうするのかに変わった。

「やっぱり元の世界に戻る方法を探そうよ。主人公の定番」

「オレらが主人公とか…なんか信じらんねえ」

「なっっちゃったんだから仕方ない。ね、ノブ？」

利香が話の相手を伸彦に変える。しかし少し考え込んでいた伸彦は反応が遅れた。

「…へ、あ、ああ」

「どしたの？ 何か悩み事でも？」

「この状況に悩まない方がおかしいだろ」

「溪也ちよつと静かに」

溪也を黙らせて利香が詰め寄る。何も言わず、ということにも出来ず、かと言って話す気にもなれなかった。

「まあ、ノブの考えそうなのは大体分かるんだけどね」

利香の言葉に思わず聞き返した。

「えっ」

「どーせ『僕は帰るべきなのかなー』とか何とか思ってるんでしょ？」

「……………」

「……………もう」

利香の呆れ半分のため息がやけに重く感じられた。決して責めているのではないが、その重圧が押しつけられないもののような気がした。

「——とにかく！ 動かなきゃ何も出来ないんだ。取り敢えずどっかに行こうぜ」
場の空気を変えるように、あるいは壊すように溪也が声を上げた。

「ずつと悩んでいるのは確かだが、溪也の言うことも一理ある。」

「…なら、まず街を目指そう。情報も必要だし、お金とか服とか色々考えないといけない」

「そうだね！ じゃあ行こう！」

意気揚々と利香が拳を突き上げ、自ら先頭に立つて森を歩き始めた。

利香の切り替えの早さに呆れつつ、二人顔を見合わせて笑ってからその後を追い始めた。

「ところで、名前どうしようか？」

そんな言葉が利香から漏れたのは僅か数分後のことである。

伸彦たちが取り敢えず目指していた街の名は《バートリー》と言うらしい。

その世界についての予備知識が全くないのだから、街の名だって、どこにあるかだつ

て分からない。

それなのに伸彦たちがそれを知り得たのには理由がある。ずばり、人と出会ったから。

「こんな森の中で何してんだ？」

そんなふうには話しかけられた。

体格のいいおじさんで、袖の短い上着から見える腕はかなり逞しいと思えた。

「えと、道に迷ってしまつて…」

他人に繕った形で笑顔を作り、利香が応対する。

この手の対人は伸彦や深也は得意ではない。率先してやってくれる辺りも、こういうことに対して利香は頼もしいと思えた。

ましてや利香の人当たりの良さが裏目に出るはずもなく。

「そんな恰好でか。無防備すぎるぞ」

「それは…えと…」

こういう返しには滅法弱いみたいだが。

「…まあ、色々あつたんだな。俺みたいのに会えたのはお前らラッキーだったな」

おじさんはふつと笑って言った。

その真意が分からず、三人揃って首を傾げた。

「俺はガウストだ。お前らは？」

「あ、わたしたちは……」

名を尋ねられ、少し戸惑ってかちらりと伸彦を見た。

その行動をすると読んでいた伸彦は一步前へ出て、ガウストと名乗った男性に言う。

「僕は……《クロウタス》。《クロウ》と呼んでください」

《クロウタス》。

ここに来るまでに考えた伸彦の偽名だ。

黒川という苗字と、伸彦の一番好きな蓮の花を掛け合わせただけの簡易的なもの。

そこに微かな羨望が混じっていることは伸彦だけにしか分からない。

(蓮——どんな澱んだ水の中でも咲き誇れる強さを持った花。僕の一番、憧れる花)

どんな人に対しても抱かなかった気持ちを抱いているのはおかしいと思った。

でも、どうしてもその考えを捨てることは出来なかった。

偽名を考える際にふと出てきたのはそのせいかもしれない。異世界でなら、違う自分

になれると思ったのかもしれない。

「オレは《ティムト》です。《ティム》でいいですよ」

「わたしは《リルカ》です！ よろしく、ガウストさん！」

伸彦の自己紹介に続いて二人も偽りの名を名乗った。

そこに違和感を感じなかったらしく、ガウストは追及してこなかった。

「おう、クロウにタイムにリルカか。いい名前じゃないか、よろしくな」

ガウストは片手をあげて返した。

その手をくいつと自身に向けてまげ、伸彦たちを促した。

「困ってんだろ？ ついてきな」

…信用してもいいのだろうか。

ふと伸彦はそんなことを思った。

だがこの状況だ、手を貸してくれるのなら断る理由もない。ガウストの誘いに甘え、三人は森を更に進んでいった。

「俺の工房はバートリーの外れにあるんだ。と言っても森と街の間にあるんだがな」

そう言いながら伸彦たちが連れてこられたのは、レンガ造りの小さな家だった。工房、というのだからもう少し大きいものをイメージしていたのだが、素朴という言葉が

似合いそうなそんな建物だった。

「ほれ」

ガウストに促されるままに中に入る。

すると、

「うわあ……………」

「凄い……………」

外の見た目とは裏腹に、至るところにたくさんのものが飾られ、一部はキラキラ光っている。

「あれって宝石なのかな?！」

すっかりはしやぎ気味の利香をたしなめようかとも思うが、自信も同じことを思っていたのでその機にもなれず。

赤、青、黄色…何色もの輝きから目を離せなくなっていた。

「どうだ、凄いだろう?」

一度奥に入っただけなら嬉しいガウストが出てきた。

「はい! これみんなすっごい綺麗!」

「ははは! そうだろう? どれもいいもんばかりなんだ」

利香の率直なコメントに嬉しそうに返事をした。工房、なのだから自分で作ったもの

なのだろう。誇らしげに胸を張る姿が伸彦の目に映った。

「ところで、ここは工房なんですよ。でもそこにあるのって」

「ん？ ああ、ここで販売もしてんのさ。工房は奥、ここは店だ」

伸彦の差した先にあるのはカウンター。ものを作るところには見えなかったのだが、どうやら当たりらしい。

「俺の店は魔法具を扱ってんだ。そんじよそこらの店とは品ぞろえは違うぜ」

魔法具、という耳慣れない単語が混ざった説明を聞き、やはりここが異世界であると痛感させられる。

二人は物足りないのかショーウィンドウに顔を近づけなら見回っている。伸彦は近くにあった腰掛に座り一息ついていた。

「ところでよ、隠さなくていいんだが」

隣に座ったガウストが不意に言った。

「お前ら、俺らとは違う人間なんだろ？」

唐突にそう聞かれ、伸彦は息が詰まった。

利香と深也にもそれが聞こえたらしく、ショーウィンドウから顔を上げている。

「俺らとは違うってすぐに分かった。その服の生地、この世界のどこにだってありやしない」

つまり、出会ったときに気付かれていたということか。ならばどうして伸彦たちを助けてくれたのだろうか。

「どうしてって顔してんな」

「！」

ガウストににやりとされ、伸彦は慌てて顔を逸らした。

「困ってるやつを放っておけなかった……それだけじゃ理由にならねえか？」

ガウストの真っ直ぐな心。善良な優しき。

それは伸彦が久方受けたことのない優しさだった。

「ガウストさん……」

利香が両手を握りしめる。こちらを見つめているのが感じられた。

溪也もどうするかは決まっているらしい。何も言わず、伸彦の言葉を待っている。

とても長く感じられた沈黙を破り、伸彦が口を開いた。

「……僕の本当の名前は、クロウなんかじゃない。二人も、違う名前です。あなたの言った通り、僕らは違う世界からやってきました。どうしてここに来たのか、それは僕らにも分かりません」

でも、と伸彦は言葉を区切る。

「あなたみたいな人に会えてよかったと、僕は思っています。それだけは確かだ」

誰かに会えてよかったなんて、言ったこともない言葉。

利香たちにすら言ったことのない言葉が、感情が、伸彦の口からこぼれた。

それが伸彦の本心だと理解することは、ガウストでも簡単だった。

「……そうか、それならよかった。俺も本気でお前らを助けようと思える」

そして気持ちを返すガウストの言葉も、本心だと理解できた。

「お前ら、名前はなんてんだ」

ガウストが再び名前を聞いた。

偽らなくていい、初めての大人に。

「……僕は、伸彦、です」

伸彦の中で、微かに何かが変わった音がした。

魔法具というのは、この世界にいる魔法使いたちが魔法を使う際に用いる媒体らしい。

かつて魔法を操る者——《魔法士》だったガウストは、伸彦たちにも魔力が宿っていることを教えてくれた。

「それなら、オレたちにも魔法が使えらることか!」

「そうだ。使う魔法はそれぞれが持つ魔法具によつて変わる。どうするか、慎重に選べ」
ガウストは店にある道具から好きなものを選んでいいと言つた。タダでいいと言われたときは、そこまでしてくれていいのかと焦つたが、

「困つてんだろ?」

その一言であつさり片付けられた。

ただ一つ、例外がある。

「……何で、わたしには魔力がないの!」

利香に魔力が宿つていないということ。

「それは俺には分からん。だが、何かしらの要因があるとは思うが……」

「ううう……、魔法少女になつてバンバン辺りを吹き飛ばしてみたのに……」

「物騒なこと考へんな」

「何か、得意なことはないか? こういう動きなら出来るとか」

ガウストからの提案に、利香はすかさず答えた。

「わたし空手が得意だよ!」

「カラ、テ……?」

「空手で通じるわけねえだろ。要はあれだ、素手で殴つたり蹴つたり……蹴るっけ?」

「それなら……」

溪也のぎっくりした説明に何かを思い出し、ガウストが隅つこの戸棚を開けた。

暫くそこそそしていたが、やがて戻ってくるとその手には、金属のプレートがあつた。

「それは？」

利香が興味津々に覗き込みながら尋ねる。

「こいつも魔法具さ。ただし、超レアな《生魔具》ってやつさ」

「せいまぐ？」

「こいつ自体が生きていて魔力を持っているんだ。だから魔力を持たないものでも、魔法のようなことが起こせる」

ガウストの説明に利香が目を輝かせた。

「じゃあ魔法使えるんだ！」

「いや、こいつには無理だ」

すっぱり切り捨てられ、途端に気を落とす利香。本当に浮き沈みが激しいと思う。

「言つただろ、魔法具によつて魔法は変わる。こいつはお前が思つてたみたいなお出来はないが、パンチやキックの威力を高めることは出来る。つまり——」

ガウストの言葉につられ伸彦たちは想像する。

利香がこれを身に着け、巨大な岩を砕いている様を。大地を砕いている様を。

「くくくっ！ カッコいい!!」

文字通り飛び上がって喜んだ利香は、その生魔具を両手で大事に受け取った。想像したその通りのことを、利香ならしかねないと思うと、少し寒気がした。

「オレ、利香に喧嘩売らねえ」

溪也がぼそつと呟いた。全くその通りだ。

利香には気付かれないようにしなければ。

「こいつは《逆鱗》^{げきりん}って名前だ。大事にしてやってくれ」

「《逆鱗》……なんかドラゴンっぽい！ 大事にします！」

深く理解をせず、利香はそれを握りしめた。

「さて、残りはお前らだ。どうする？」

「オレは……元々素手の喧嘩しかしてこなかったし……」

「僕は戦うなんて……考えたことなかったし」

利香のようにすんなりと決められることなく、店を見て回っているが、ピンとくるものがあった。

溪也は少し違うようだが、それでも決めあぐねているのは変わらない。

と、溪也の目にとあるものが止まった。

「なあ、こいつは……」

指を差した先には少し太めの棒のようなもの。先端には宝石が填められ、その横はメープルの葉のように広がっている。

「そいつは《魔法剣》さ」

「《魔法剣》…、魔力を持った剣ってことか？」

「そうだ、そいつは《十字の崩剣》^{マリックテイア}。三種の属性を併せ持った剣だ」

溪也の視線が剣に戻る。

不思議と引かれ合っている、そんな気がした。

こいつとならやっていけると思えた。

「ガウスト…さん、これをくれ」

「ガウストでいいぞ。ああ、持ってけ」

笑いながら剣の一部、恐らく柄を差し出した。受け取った溪也はその重さに思わず落としかけるが、その重みを噛みしめるかのように強く握った。

「残りはお前だけだ」

ガウストが伸彦に向き直る。

「と言つても、ピンとくるものがないんだ」

「どんなふうにしたらいいのでもないんじゃないや、俺からも勧めることは出来ないしな。ま、もうちよつと考えてみる」

利香は溪也のものは決まったのに自分が決まっていないう状況で、段々と焦りを感じてきた。

足早に店内を歩き回り、一つひとつ見ていくがやはりピンとくるものはなかった。ふと利香たちの方に顔を向ける。

既にものが決まって喜んでいる二人を見て、羨ましいと感じた。

そして同時に何かを感じた。

感じた先は、二人の奥から。

「ガウストさん、店の奥に何かありませんか」

その言葉にガウストはピクリと反応した。

「どうしてそう思った」

今までと違った声色で聞き返す。

伸彦も顔を逸らさず答えた。

「直感です」

我ながら漠然とした返答である。

しかし、それでも他のものを感じなかったものを感じたのだ。

「…ああ、ちよつと待ってろ」

やがて、少し重たい雰囲気を漂わせながらガウストが奥へと入っていった。

三人で顔を見合わせていると、「それ」を持ってすぐに出てきた。

「それ」は、紅い宝石が埋め込まれ、ツルが渦を巻いたかのような小さなブローチ。「こいつは元々、俺が使ってたんだ。でもこいつから何か感じたってんなら、きつとお前は…」

そう言いながら伸彦にそれを差し出す。

ゆつくりと手を伸ばしてそれを掴むと、不思議な感覚が体の中を駆け巡っていったよ
うな気がした。温かく、それでいて力強い流れ。

それに気付いたときにはすでに、ブローチはその形をしていなかった。

植物のツタが伸びるかのようにその渦を伸ばしていった。その先から葉を付け、蕾を
付け、小さく花びらを開かせた。

その花は、まさしく《蓮の花》。

「その魔法具の名は《木蓮マダグノスタニの杖》。清き水の魔法陣を操る魔法具だ」
《木蓮の杖》。

先端に咲いた小さな花が、伸彦の目から離れなかった。

「そいつは主と認めたものにはしか花を咲かせない。お前は、認められたんだな」
ガウストが呟く。

かつて自分が認めてもらったことを思い出しているのだろうか。

「そいつを、お前に託す……大切にやってくれ」

木蓮の花と共に、ガウストの想いを託された気がした。

何かを託されることなんて初めてだったが、自然とそれを受け入れることが出来た。

「——はい」

こうして、三人の異世界魔法士が生まれた。

一人は、魔力を持たないが強力な攻撃力を身に着けた《拳闘士》。

ワイシャツとショートパンツにプレートのついたブーツを履き、右側の髪を赤いリボンで結い上げた。

——リルカ。

一人は、三種の魔力を操る魔法剣を携えた《魔剣士》。

黒のハーフジャケットに黒味のある赤いパンツにブーツを履き、頭に新しくバンダナを巻いた。

——ティムト。

一人は、木蓮に愛された清き水の魔法を操る《魔法士》。

青いジャケットに黒いパンツ、黒いブーツに身を固めた。
——クロウタス。

彼らの冒険は今、始まったばかり——。

episode. 3 魔法士

「さて、お前らが魔法具を手にしたってことは、つまり昇級演武に出る必要がある」

開口一番、ガウストが宣言した。

「「しよきゆうえんぶぶ?」「」」

当然三人は首を傾げた。

「魔法士や拳闘士ってのがいるってのは話したよな? それらには個別に格付けがされるんだ。昇級演武ってのはそれを決めるものさ」

「格付け?」

魔法士とは職業だと言う。

つまりは上司と部下、といった関係を表すためだろうか。

「格付けによつて受けられる仕事が変わったり、報酬が変わったりする。それがなければ仕事出来ないことだってある」

ガウストが真剣な趣きで告げる。

「つまり…その昇級演武ってのに出ないと…」

タイムがクロウの思考を口にして、ごくりと固唾を飲んだ。

「ま、飢え死にするな」

三人の気持ちとは裏腹に、ガウストはあっけらかんと答えた。

クロウたちはそれぞれ違う形で「ぐはあ…」と項垂れる。

いきなり異世界に飛ばされ、知識も金もない状態で生き延びるのは困難だ。是が非でもそれは避けねばならない。

「結局、それに出て結構いい成績を残せばいいってこと?」

「まあそう言うことだ」

ざっくりとしたリルカの言葉にガウストは頷いた。

「でも、具体的に何をやるの?」

「端的に言えば《バトル》だ。何人かで闘技場に出て戦い、その時の力で判別される」

「判別、ということとは、誰かが見ているのか」

クロウが質問する。

「《評議会》って言うんだ。魔法士や拳闘士たちだけじゃねえ、俺らみたいな一般人も管理してる」

「管理って…また嫌な響きするやつじゃねえの」

あからさまにタイムが嫌な顔をする。何かに縛られたりするのを好まないタイムらしさではあるが、今回ばかりはそれも言ってられない。

全ては生き残るためである。

「まあお前らは、それなりに腕に自信あるみてえだし何とかかなんだろ。——大会まではあと二週間ある。それぞれやりたいように鍛えるこつたな」

異世界にやってきてから三日。

クロウは、とある山中の湖——ミルティシア湖の畔に立っていた。

その目は優しく閉じられ、呼吸は深くしつかりとしている。前に突き出された両手には、杖状に伸びた《木蓮マグノスタニの杖》。

「……………」

風が頬を撫でる。

水面がふわりと揺れ、静かな波紋を広げる。

その中で、クロウはひたすらに己の心を澄ましてゆく。

「……………」

誰か草を踏む音がした。

それまで一定に保たれていた集中が微かに揺らぎ、すぐに立て直そうとした。
だが、

「そこまで」

別の声によってそれも途切れてしまう。

「ふう……、うまくいかないな……」

閉じていた目を開き、溜め息をつく。僅かにだが額には汗も浮かんでいた。

「そう簡単に行くようじゃ、修行とは言わねえな」

クロウの瞑想を止めた人物——ガウストが草むらより出てきた。

「とは言え、始めて三日でここまでやれるとは思ってなかった。上出来だ」

「でも、まだすぐに周りに流されてしまつて……。あんなに小さい音でもとても気になつて」

「だからそう簡単には行かねえよ。もっと気張れよ」

昇級演武のことを聞いたあと、クロウたちはそれぞれのやり方で強くなるために自主
練に入ることとなつた。

が、

『お前は俺と山籠りな』

と、抵抗する間もなく見事に首根っこを掴まれそのままずるずると引きづられた。そのときティムとリルカが笑っていたのは鮮明に覚えている。

ミルティシア湖まで連れてきたところでようやく解放されたクロウは、すぐにガウストに真意を尋ねた。

『お前はあいつらの中で一番弱い。それはお前だつて分かつてるだろ。だが、お前には一番魔力が宿っている。それを俺が使いモンになるようにしてやるってことさ』

自分でもまだよく分からない魔力をガウストが感じた、というのに一応の理解をして、こうして今に至る。

クロウの修行はまず瞑想から始まった。

魔力を集中させ、高めるためにはそれが一番なのだとか。

そしてガウストは瞑想を行うクロウをひたすらに邪魔する。先程の草の音も彼が生んだものだ。ああして音を立てたりして注意を反らせてくる。

「まだ魔力を扱いきれてねえな。自分の中の流れに身を任せるんだ」

ガウストが少し歯を見せて笑う。漫画風に言うならニヤリともニツコリとも違う、ニカリといった感じだ。修行に入ってから気付いたが、彼はいつもこの笑い方をする。

「と言つても、まだ感覚が掴めなくて…」

「だからそれを掴むための瞑想だ。もつとよく感じろ」

ガウストの語気に押され小さく「……はい」と答える。

まだまだ分からないことだらけだが、それでもやるしかない。

そこでふと思つた。

自分がここまで頑張つて何かを成そうとしているのは、いつ以来だろうか。

恐らく七年前はそれなりにやっていただろう。だが、あれが現れてからはどこかおぎ

なりになっていた気がする。全てに嫌気がさして中途半端になっていた。

それが今、こうして必死になっている。

生き抜くためとは言え、少し不思議な感慨に囚われた。

思考の中に沈んでいた意識が外部の音に反応する。

ガウストが湖畔に立ち、その全身から魔力を放っているのを感じた。

「さて、そろそろ続きといこうか」

「…はー」

昇級演武まで、あと十一日。

ゆっくりはしていられない。

クロウは小さく息をはき、一步踏み出した。

その頃。

バートリーの町外れ。

ガウストの魔法具店に一つの影が現れた。

何度か呼びかけ、返事がないことに少々不満を感じる。その傍らに目を向けると、張り紙と『しばらく休店いたします』の文字。

影はしばしその場に立ち尽くし、やがてもと来た道を歩き出した。

「——ふうん。何だか、面白いことが起きそう」

クロウがガウストと修行に暮れる中、リルカやティムもただ‘その日’を待っているわけではない。二人もそれぞれに修行を行うためバートリーの町を離れていた。

「ノブ……大丈夫かな……」

「ガウストなら平気だろ。にしても、あいつのあんな顔、初めて見たな」

ティムの頭には心底驚いた表情を見せながら引き摺られるクロウの姿。

「そう？ 昔はあんな顔もしてたよ？」

「昔つて…：そういうやお前幼馴染だったか。ま、それであいつだけ強くなって帰ってくるなんてのは御免だろ」

「まあね！ わたしも修行するよ！ それに昇級演武までまだ時間あるのにサボってたなんて知れたら顧問に怒られる」

「心配事はそつちかよ」

かく言うティムも日頃の喧嘩紛いの剣筋でこの世界を生き延びられることは出来な
い。

ちゃんとした師の元につくことは出来ないだろうが、それでも強くならなければ。

「それと、《ノブ》とか言うの禁止な。こっちはオレらの世界じゃねえんだから」

「あ…：そうだね」

ここはもうオレたちの世界ではない。

まるでノブみたいな考え方だ、と思いつつティムはリルカと別れた。

目指すはコラギ山。

ミルティシア湖を山頂に湛えるそこを目指し旅立った。

一方、タイムと別れたリルカは暫くして目的地に到着した。

バートリーの隣町、ベニビアである。

ここにきた目的は大してないのだが、バートリーは修行するには立地が悪く、更には強者と呼ばれる者もいなかった。

なので、別の町へ行けば強い者に会えるかもしれないと考えた。至極単純だが、動かないよりはいい。

(まずは情報かな)

異世界に渡ってしまった彼らの中で一番《架空の存在》に慣れてきたのはリルカである。

ゲームをしているかのように、取り敢えず酒場を探して町をぶらついた。

「にしても…」

ぼそりと呟いた言葉。

続きを口にしかけ、手前で飲み込んだ。

タイムはいなくてもまあ良しとして、クロウが傍にいないのは何かと気掛かりではあった。

(こんなこと考えてるのは変かな…？ でも、目を離すとすぐネガティブになるから)

幼い頃に負った傷は未だ癒えていない。幼馴染ともあれば心配しないはずがない。

リルカ自身もクロウから投げ所^{ところ}にされているのを自覚している。

だからこそ、時間があれば彼の側にいたのだ。

ガウストがいい人だと言っても、その点に関してはやっぱり不安が残ってしまっていた。

(うんにゃ！ わたしが考えてもどうしようもないもん。ここはすっぱり割り切って修行修行！)

ネガティブに陥りそうなところで気持ちを切り替え、ようやく見つけた酒場へと突撃した。

今やる事は一つ。

強くなることだ。

それからあつという間に二週間が過ぎた。

ハードな修行を真面目にこなしでいったクロウは、ガウストが驚くほどの成長ぶりを見せた。

修行をつけたガウストも満足げで「これなら行ける！」と太鼓判を推した。

そして二人は予定より少し早く山を降り、昇級演武が行われる町、リースアスへとやって来た。

あらかじめ決めてあつた待ち合わせの酒場に到着すると、リルカとティムは既にそこにいた。

「二人共…早いな」

クロウは少し驚きながら二人を見比べた。

二週間ぶりに会つた二人は、別れた時より明らかに逞しく見えた。クロウが山籠りをしている間にも修行に明け暮れていたのだろう。

特にリルカは。

元々引き締まっていた体つきが更に切れ味を増しているように見え、少し身震いをする。

「どうしたの？」

「いや……リルカ、喧嘩は程々にね」

「何よ、ティムじゃあるまいし」

「オレを喧嘩ばつかしてると思うなよ！」

とぼつちりを受けたティムもまたどこか違う雰囲気を感じる。

そして最初になんか気がついたことを言ってみた。

「ティム、髪、どうしたんだ？」

クロウの疑問の通り、ティムの髪色が以前と違っていた。

自分と同じ黒髪だったはずの友人はいつの間にか銀髪になっていた。

「んー？ イメチェンだよ」

「わたしも最初はびっくりしたよ。久々に会ったらいきなり年取っちゃったんだもん」

「染めたんだよ！ オレを年寄りみたくすんな！」

どうやらリルカと別れた後に染めたようだ。今までと印象がガラリと変わり、ちらついたり一層際立った気がする。

しかし先ほど感じた通り、ティムも鍛えてきたことには変わりないようだ。クロウは段々と不安になってきた。

（僕は、二人に付いていけるだろうか……）

ガウストが太鼓判を推してくれたとは言え、二人の実力は未知数だ。特にリルカは。空手と日頃の喧嘩で鍛えた体を、どうやったってクロウが越すことなど出来ない。元より運動も得意ではないため、今回の修行もかなり辛いものとなっていた。

せめて足でまといにはなるまい、と思い密かに拳を握った。

「お前らもやる気は十分だな。んじや、少し早いがエントリーを済ませちまおう」

そんなクロウの心情を知らず、ガウストが三人を引き連れて店を出た。目先のことに気を取られ三人が忘れていた勘定をクロウが払ったのは別の話。

屋台が立ち並ぶ道を進み、やがて開けた場所に出た。

そこに見えるのは――

「でっ――かあ！」

巨大な壁だった。

いや、よく見れば両端は曲線を描いており、それが筒状になっていることを予想させた。

つまりは、《闘技場》コロシアム。

「ここが昇級演武の会場《ボツエ・ドウラス》だ。受付は確か……」

そう言って闘技場の端を指差そうとした時。

「やっと思つけた」

少女の声が耳に届いた。

振り返ってみるとそこにいたのは、肩までの黒い髪、ハーフジャケットのような上着に袖を通し紺のミニスカを履いた、いかにも、異世界の人間らしい格好をした少女が。

「あ、アホ毛——」

「おい」

リルカが不意に言いかけた言葉をタイムが遮る。

初対面の人にそれは失礼だ。

しかもこっちの知識過ぎる。

「おお、お前か。用があつたのか」

「まあね。でも、それはもうよくなつたわ」

どうやらガウストの知り合いらしい。

だが、話している内容はさっぱり理解出来ない。

「その黒髪、私と勝負しなさい」

——訂正、ほんの少し理解出来た。

この人、絶対おかし。

びしっとクロウを指差し、堂々とそんな事を言つてのけた少女。
彼女との出会いがクロウたちに大きな影響を与えることは、まだ知らない。

episode. 4 昇級演武開始

——昇級演武とは、エンド・オールターは西方、ここカイル聖王国における全ての諍いを滅するため、受け継がれしものである。

力を押し量り、それを認め、己が道を決めるが良い。

…と受付にあったパンフレットに書いてあった。随分と大袈裟なものだ。

きつとこんなことを言っておきながら、管理する側がやりやすいように仕組みを作っただけだろう。

まあそのお陰で、無茶をするやつが減るのは事実だろう。

現にこうしてクロウも、襲われても反撃出来るほどの実力をつけることが出来たのだから。

昇級演武。

自らの実力を指し示す《序列》を決定付ける大会だ。いや、催しと言った方がいいかもしれない。

会場に入ってから辺りの熱気がすでに高まっており、まるで名勝負を見た直後のようだった。現実でもこれほどに熱狂するものが果たしてあるだろうか。

謎の少女との遭遇からなんやかんやあり、クロウたちは今まさに催しが始まるのを待っていた。

リルカは最初の試合に出ると言うことで既に別れている。

きっと彼女のことだ、こちらを見つけたら手でも振ってくるだろう。クロウは返す気はなかったが。

「しっかし、久々に来たがここまで盛況してたとはな」

ガウストが懐かしそうに目を細めながら呟いた。

「昔は出てたのか?」

「魔法士や拳闘士になりてえやつらは皆通る場所さ。序列に数えられもしねえやつを金かけてまで雇う気になるか?」

「……なるほど」

ガウストもそうして生きてきたのだろう。

すると何故魔法士を引退したのか気になる。実際に指導を受けた身として、まだまだ活躍出来ると思えた。

だがガウストはそんな気持ちを読んだのか、視線を合わせようとしなかった。どうやらこれ以上は話す気はないらしい。

「ンなことよりも、もうすぐ来るんじゃないかねえの？」

タイムの見る先には円柱を押し広げたかのような巨大な舞台。そしてその周りに大量の水が溜まっていた。

「お前らもルールは一緒だからな」

ガウストがさらに言葉が続けようとしたとき、

『お待たせしましたア!!』

闘技場外にも響きそうな大音量で始まった実況。

『ただいまより年に二回の大勝負、《昇級演武》開幕です!!!』

ワアアアアッ！ と歓声が一気に広まり、あつという間に会場中を包んだ。あまりの音量に思わず耳を塞ぐ。その途中で「喋ってたのに」と聞こえたのは、きつと気のせいだろう。

『演武のルールは簡単！ 相手をノックアウトするか水に落としてしまえばOK！

フィールドに最後の一人となったところで終了だ!」

「なるほど、確かに簡単だ」

「要は全員倒せつてことだよな」

「そうだな」

ルール説明をきちんと理解し、タイムと領き合った。もうガウストは放っておいた。

「だがそんだけじゃねえ」

いつの間にか復活していた。

「どういふことだ?」

「相手を全部倒せりや確かにいいだろう。だが、重要なのは審査されてるってことだ。自身の實力を見せつけなけりや、最後の不意打ちで勝つたとしてもいいランクにはなれねえ」

つまり、相手も倒しつつ自分のアピールもしなければならないと言うことらしい。

実に苦手な分野である。

主張することはあまり得意ではない。そのせいであなっていたとも言えるかもしれないが。

「まあリルカなら大丈夫だろ」

「うん、何だかんだ言っつてこういうの慣れてるだろうからね、一番」

三人の中で一番DCをやっていたのも彼女だ。それなりの表現の仕方や、こういうときの攻略法も頭に入っていることだろう。

『それではお待ちかね！ 最初の試合です！ 最初は《拳闘士》！ 第一グループの登場です！』

高揚を誘う実況に促され、三人の視線はフィールドへと向けられた。

勢いよく噴射された白煙と共に選手たちが姿を現した。いかにもごつそうな男たちの中には小型の選手も混じっている。

リルカはそんな彼らの一番後ろにいた。赤い耳のようなりポンはとても目立ち、すぐに気付くことが出来た。

リルカも気付いたようで案の定大きく手を振ってきた。クロウは返さなかったが、律儀にタイムは「おーい！」と手を振り返した。その様子をガウストがニヤニヤして見ていたが無視し、クロウは視線を他の選手に向けた。

筋肉の盛り上がった男たちは勿論のこと、細身の男も目つきが違って見えた。どうやら一筋縄では行かないようだ。

そしてそれは、リルカも感じていた。

(完全に舐め切ってるわね)

女はリルカのみで、残りは全て男だ。しかも、自身より体格が小さいともあれば簡単

に捻り潰せると思うだろう。

だが、

(顧問も先輩も言つてた。見た目で判断するなつて。さもないと——)

選手たちの目が錯綜する。

『では試合、開始ッ!!』

高らかに宣言された合図に反応し、二人の男がリルカに向かって腕を振り上げ突進してきた。

眼前にまで拳が迫つた瞬間、すれ違うように拳を突き出した。

瞬間的に間合いを詰めて放たれたその攻撃は相手よりも早く敵に届き、鳩尾にめり込んだ。

その体勢のまま左足を地面につけ、全力の回し蹴りを放つた。それはもう一人の脇腹にヒットし、相手はくの字に曲がった。

「ぐふアッ!?!」

一瞬にして吹き飛ばされ水へと落ちたその光景を目撃した者は、一斉にリルカへと顔を向けた。

大勢の注目を浴びながら、リルカは堂々たる姿で言い切つてみせた。

「痛い目、みるわよ?」

客席にいた二人の友人は暫し全身を震わせていたという。

十分もかからずして戦闘は終了した。

結果は、リルカの圧勝である。《逆鱗》を解放した後はもう誰も止められなかった。

床に転がる者、水中に投げ出された者。実にあつけない幕引きだった。

『つ、つ、強過ぎる！ 何なんだ、この初ニューフェイス顔は!?!』

「まあ、あいつだし」

「そうだね」

会場全体が騒然とする中、クロウとティムは至つて平常である。

耐え切れずガウストが口にした。

「お前ら…あいつがあんなに凄いやつだって知ってたのか?」

「リルカ、オレらのとこじや国一番になれたかもしれない実力者だぜ?」

「リルカには喧嘩しようとするやつもいないよ、結果は見えてるからね」

しれつと答えたが、現に全国大会あと一步というところまで行つたのだ。実力は折り

紙つきだ。

そんなことを知る由もないガウストは混乱し出していた。

そこに、追い討ちがかかる。

『——リルカ、ランク《大将》、序列五位』

一瞬の静寂が闘技場を支配する。

「国、一番、大将…俺らの国は…？」

「ガウスト？」

「待った、なんか勘違いしてる」

「え、おいガウスト！ リルカはそういうヤバイことになるまでの力はねえって！」

その後混乱を極めたガウストは、リルカが戻ってくるまで続いた。

「全くもう、人が揉みくちやにされたのを何とか抜け出して来たっていうのに」

「…面目無い」

「こんなガウスト初めて見た」

ぶんすかと頬を膨らませながらそつぽを向くリルカ。あれだけ暴れ回ったので相当

質問攻めにあっただろう。自分なら耐えられない。

時間は少し過ぎていて、まもなく魔剣士部門の第四試合が終わろうとしていた。剣を持った七名ほどが対峙している。

「ガウスト、大将つていうのはどのくらい凄いランクなんだ？」

ガウストを平常に戻すため質問する。すっかり萎れていたガウストは姿勢を直して向き直った。

「拳闘士ランクの二番目だ。実質権力者になったとも言える。拳闘士は上下関係が厳しいって聞くからな」

「え、じゃあリルカが命令したら、下位の人達は従うのか？」

「勿論、そこに信頼があつてだ」

その言葉に胸を撫で下ろす。リルカの命令を絶対遵守などと言われてはほとほと困るところだった。

あの姿を見たあとということもあり、なるべく荆り合いたくない。

試合終了の合図が鳴り響き、すぐにランクの発表が行われた。

ランクを決定する《評議会》とやらは、分厚いマジックミラーに阻まれて視認出来ない。ただ淡々と告げられる結果発表には、どこか無機質さを感じさせた。

その後第五試合が始まった。タイムもようやく出場となり、魔剣を片手に大層暴れ

回っている。

その中には、至って普通の剣を持って戦っている者もいた。

「魔剣士って、魔剣を持つ者だけを指すんじゃないんだな」

「ああ。魔力を持っていても魔法士ほどの力を出せなかったり、いい魔法具に出会えなかったりで魔剣士になるやつは多い。魔剣持つてるやつの方が少ないさ」

ずっと膨れていたリル力は少しこちらに顔を向けた。

「じゃあ、ティムってばレアなんだ」

「あいつ自身には魔力もある。まあクロウほどじゃねえから、必然的に魔剣士になつてたろうけどな」

「ふうん…なるほど」

そう言つて視線を落とす。

ティムの戦闘スタイルは、弱い相手には素手で、それ以外を剣で対応するという、まさしく二刀流だった。さらに驚いたことは、

「抜刀って…」

再会したときも気にはなっていたが、ティムは見た限りでは剣を持っているようには見えなかった。丸腰同然である。

しかし、思わぬところから彼の魔剣《マーク十字の崩剣ティア》が現れた。

左腰に手を当てるかの如く、袖口に右手を突っ込むと、そこから美しい銀色の刀身が姿を見せるのだ。

「敵を欺くにはいいところじゃねえか。あの剣自体は普段柄だけの状態だしな」

「…上手く行けば、箆手にもなると?」

「そうだな」

そんなことは流石に無いだろう。

クロウが呆れている間に試合が終了し、ランク発表へと移った。

『タイムト、ランク《練魔劍士^{れんまけんし}》、序列四位』

おお、と再び観客がどよめいた。

今回の初顔がいきなり上位に食い込み、その実力を惜しげも無く披露している。常連の出場者たちを出し抜き、タイムが今回の高位者として決定された。

「練魔劍士…上の中ぐらいだな」

「タイムも上々じゃないの」

「うん…次は僕か…」

よっぽど人数が多いのか、魔法士部門の試合は十以上行われる。クロウは二試合目だ。

「いつてらっしやい」

リルカが微笑みを向ける。

こうして面と向かって言われるのは久しぶりだ。

何だか少し気恥ずかしくなり、視線を逸らす。だが顔は向けたまま。

「……いつてきます」

クロウの演武が、まもなく始まる。

episode. 5 黒髪の少女

突然だが、クロウは運動が苦手だ。

具体的に言えば通知表で三や二を取るくらい。

リルカは当然満点の五、ティムも四以上は毎回取れているらしい。

そんな運動出来ないいかにも現代っ子のようなクロウが、猛者たちの集う昇級演武で好成績を得るには、本当に難題ばかりが積み重なった。

当初は魔法の使用だけでも全く体がついて行かなかった。

だがそこで一つのヒントを得た。

それからの伸びが、ガウストに太鼓判を押させる理由となる。

拳闘士や魔剣士と違い、魔法士には明確な点が二つある。

一つは、属性の相性で試合の優劣がかなりはつきりについてしまうこと。

一つは、《魔法こそが絶対》という理念が根強くあるということ。

そこに、クロウの勝機がある。

本日何度も吐き出された白煙の中に、クロウはいた。

紺色のジャケットの裾が風圧ではためく。その左襟には深紅の輝きを放つ宝飾があつた。

『続いて魔法士第二グループ！ 喧噪の中を戦い抜くのは一体誰だ——ッ!!』

煙の間を縫つて十人ほどの魔法士たちが姿を現した。その中にはクロウの姿もある。

決して目立つことが好きではない。むしろこの上なく嫌いなものだ。

それでも己の筋を通したいことだつてある。

例えば、心を許した友達を失いたくないという我儘とか。

「あいつ…大丈夫かよ」

「はっは、心配ねえさ。俺が太鼓判を押してやったんだからな」

「ぜんっぜん安心できないんだけど」

ガウストが快活に笑うが、リルカとティムには未だ不安が残っていた。

それもそうだ、二人と違って自己主張が特に嫌いなクロウが、仲間のいない人だからの中心に立とうとしているのだ。心配にならないほうがおかしい。

そんな気持ちを知ってか知らずか、ガウストが首を傾げる。

「そんなに心配か？」

「だってあいつ目立つことが一番嫌いなんだよ？ おまけにネガティブ」

リルカが口を尖らせる。

同時に白煙の中央に立つクロウを見下ろしながらティムが続けた。

「おまけに一番意地っ張りなんだよ」

「意地っ張り？」

ガウストが驚く。彼が見た限りではそんなようには見えなかったのだろう。

だがティムたちは知っている。

「まあ、意地っ張りじゃなかったら大会に出る気にもなっていないか」

『それでは、試合——開始ッ！』

開始のゴングが鳴り響くと同時に、一人の魔法士が全範囲攻撃を放った。突然襲ってきた爆炎に、クロウは冷静に対処する。

（大丈夫。この魔法具を、この花を信じれば！）

瞬間、爆発に似た衝撃が会場全体を襲った。客席までも震動が伝わり、どよめきと煙が辺りを包む。

そのときには半数が衝撃で水に落ち敗北となっていた。残っている者は何らかの防御を行ったらしく、それでも完全に防ぎきれなかったようで僅かながらにダメージを負っている。

その中で、水色の光が一回、瞬いた。

(……いける。この花となら！)

煙が晴れるころ、クロウはそこに立っていた。開始時と全く変わらない、無傷の状態だ。

「何だと…!?!」

開幕仕掛けた魔法士が驚愕の声を漏らす。

衝撃が起きた瞬間に何をしていたのか、それを知っているのはクロウと技を教えたガウストのみ。いきなりだったため奥の手を使ってしまったが、どうやらそれは誰にもバレなかったようだ。

想定外のことには敵は動揺を見せたが、すぐに別の詠唱を始めた。面食らっていた他の魔法士たちも立て続けに詠唱を開始する。

それでも慌てずに、クロウも動いた。

「——行けっ!」

自分に言い聞かせるように短く放ち、走り出した。

同時に右手を左胸に鬩し、魔力を流す。そこにあるブローチが爛々と輝きを放ち、小さな魔方陣を展開した。

自分の体が軽くなるのを感じてから、クロウは全力疾走を開始する。今までなら考えられないほどのスピードで地面を蹴る。風を切る音が微かに耳に届く。

漫画のような動きであつという間に敵の懐に潜り込んだクロウは、ブローチに更に意識を集中させ、力を開放する。

「パアアアアアッ！」と光が分散し、凝縮する。ほんの一瞬の後、右手には蕾を付けた木蓮マダダノスタニの杖が握られていた。

「くそっ！ 何なんだこいつ！」

悪態をつきながら迫られた魔法士は火球を放った。

かと思えば、その炎は突然掻き消える。

クロウが杖をバトンのように素早く一回転させ、シールドを生み出したのだ。

「なっ…!?!」

魔法士が何度目かの驚愕を見せる。

その姿を視界に入れながら木蓮の杖を敵に向け、一つの魔方陣を展開する。

その魔方陣は傍から見ればまだ魔法を齧ったばかりの初心者で作れる簡素な魔方陣であり、危険度は殆ど感じない。何度か戦闘経験がある者だったら特に対処をすること

もないだろう。

それは目の前の敵も同じようで、顔に微かな安堵を浮かべていた。

それこそが、クロウが狙っていたことなのだが。

「――《水戀》！」

瞬間、小規模の爆発が起きる。

簡素な魔方陣にそぐわない高威力の攻撃に意表を突かれた敵は、為す術もなくフィードルの外まで吹き飛ばされた。

続けてクロウは振り向きながら、魔方陣を離れた敵へといくつか飛ばした。

「《水戀・練武》！」

放たれた魔方陣が爆発を起こし、的確に相手を外へと追いやる。

それを横目で確認しながら、クロウは更に動いていた。

(まだ六人残ってる。次は…)

慣れない運動をしながら、冷静に分析を行う。本来だったら考えられないことだが、今はそれを実現する術を身に着けていた。

修行の折に生み出した魔力の操作技術。ガウストから意識的に魔力の流れを操作するコツを聞き、自身の足りない運動能力を上げるための魔法を独自に編み出したのだ。

それが試合の最初に行使した魔法《強化》、まだ魔法士たちが完全に会得し切れていな

い、能力強化の魔法である。

強化した脚力で高々と飛翔し、空中に三つの魔方陣を置いてくるように配置した。敵の位置を確認しながら着地し、魔法を放つ。

「《白陽驟雨》！」
ミルキトゥエル

配置された魔方陣から白い光を纏った雨が降り注ぎ、数名の魔法士をダウンさせた。何とか攻撃を回避した魔法士がクロウ目掛けて魔法を放つ。今度は雷属性であり、水属性であるクロウには効果的である。

まあ、当たればの話だが。

「っー」

クロウは雷に向けて杖を回転させる。

生み出されたシールドにぶつかった雷は、先程の炎と同じように掻き消えてしまった。

もうすっかり見慣れてしまった驚愕の表情に向けて爆発の魔方陣を飛ばし、クロウはようやく立ち止まった。

その時フィールドに立っていたのは、クロウのみ。

『…し、終了…！ これはまた凄い新人が現れた！ 一体、どのランクとなるか…！』
クロウの暴れっぷりに黙り込んでしまっていた実況が叫んだ。観客のどよめきが波

のように広がっていった。

試合の行く末を黙って観戦していたティムたちは、二人揃ってあんぐりと口を開けていた。いや正確には開けんばかりに驚愕していた。

「は？ 何あれ？ あいつあんなキビキビ動けるような奴じゃないのに。体育とかいつも成績悪かったのに。垂直飛びとかクロウ絶対無理でしょ」

「と言うかどうやって魔法を防いでんだ？ 杖回したら魔法消えるのか？ え…何か頭が追い付かねえ」

周りの観客以上に混乱しているのは元のクロウを知っているこの二人だったりする。

ガウストがニカリと笑いながら何故か胸を張った。

「あいつの身体能力はあいつの魔法によるもんだ。魔力によって脚力とかを強化してるんだよ。タイク？ ってのが何なのかは分かんねえが、理屈はそういうことだ。あんな芸当すんなり出来る奴は今んとこクロウだけだな。あと、魔法を防いだのは木蓮の杖固有の能力だ。杖を回している間だけ、強固な防御壁を展開する。まあ範囲が杖の長さ分しかないけどな。———どうだ？ 俺はあれをずっと使ってたんだぜ？ 俺の凄さが分かったか？」

「クロウ…凄いい！」

バツサリと両断され、ガウストが深く項垂れた。どや顔で解説をしていたとは思えないほどに情けない姿である。そしてティムたちは見向きもしない。

唐突に評議会の無機質な声が会場に響いた。どよめきが一瞬にして消え去り、皆がその声に耳を澄ませる。

『クロウタス、ランクフォアクティ《水四魔士》、序列一位』

一瞬の静寂が辺りを包んで。

ワアアアアッ!! と歓声が一気に広がった。ほかの魔法士たちの発表が聞こえなくなるほどだ。

「水四魔士……かなりの高位ランクだ。ティムより上だな」

「マジかよ……」

「凄いやクロウ!」

発表の内容に素直に驚きながら、客席からリルカが両手を大きく振った。それに気付いたクロウだが、逡巡したのちぶいっと別の方を向いてしまった。恐らくもう目立つのは御免だ、とでも考えているのだろう。その様子を見てティムは思う。

そしてクロウも思っていた。

「あいつ一体誰だ？」

「誰かの弟子とかじゃない？ でないとあんな動き出来ないわ」

「んー、あの魔法具どつかで見たような…」

「最初にやってた大将の娘と仲間らしいぜ！」

「これは今後が期待出来るな！」

様々な観客の声が上がり、クロウに対するコールが沸き起こる。その中心にいることがもう耐えられず、俯いたまま出場者ゲートへと走っていった。

だが、逃げる中でクロウの頭には別のことが浮かんでいた。

（出来た。僕にも出来たんだ。何かを信じてやり遂げることが）

それはクロウにとって結果よりも大事なことだ。

自分の我儘を貫くために必要な力。

誰かを守るための、自らを信じてくれた友達を守るための力。

誰も見ていない入場者通路で、ひとり拳を握った。

「これでスタートラインなんだ。クロウタスとして、生きていくための」

もう二度と味わいたくない緊張感から一刻も早く離れるべく足早に観客席に向かっていたクロウは、その途中で目的の人々を見つけた。赤いリボンと染めたばかりの銀髪は紛うことなきリルカとティムのものである。どうやら戻ってくるのを先に待っていてくれたようだ。

途端機関銃のように向けられる注目を感じ、止まりかけた足を進めて二人の元へと駆け寄った。

「視線が怖い」

「開口一番それかよ」

「まあクロウらしいよね」

何気なく始まったその会話も、傍から見れば違ったものになる。

トンデモ無双を披露した大将のリルカ。

抜刀という珍しい戦法を見せた練魔剣士のティム。

そして《強化》と魔方陣による驚きの戦いを行った四水魔士のクロウ。

強者の部類に括られるランクを得た三人が仲睦まじく会話しているその様子は、ある

種の驚きを秘めていた。

「よくやったぞクロウ！ あの短期間でこれだけ強くなるとは思ってなかったがな」

「自分で修行に引つ張っていったのに……。でも、ありがとう。お陰で何とかなつたよ」
すらりと口に出たお札の言葉に、リルカとティムが硬直する。

もう何回思い出したか分からない以前のクロウと比較し、その成長ぶりを心から噛み締める。

「ところで、四水魔士ってどのくらい凄いの？」

「ティム以上リルカ以下ってとこだな。普通の魔法士たちと比べたらお前が一番上だよ」

「う……」

正直あまり嬉しくない誉め言葉を頂く。目立つことはもうしたくないのだが。

「……………ふたりとも？」

ふと二人が黙っていることに気付きクロウが声をかける。

「クロウ——っ!!」

「へっ、えっ、ええっ!? 何で二人とも泣きながら抱きつくの？ え、僕なんかした？」

「クロウ……いい子に育てて…グス」

「リルカの子供じゃないんだけど」

「祝杯だ！ こいつのために祝杯上げるぞ！」

「ガウストどうにかしてくれ」

「無理だ」

和気あいあいと盛り上がりいつの間にか更に注目を集める中、誰かがガウストの肩をポンと叩いた。

「盛り上がっているとところ申し訳ないんだけど」

錯乱と言つてもいいほど暴走していた彼らの注目が彼の背後に立つ人物に向けられる。

そこに立っていたのは、見覚えのある黒髪の少女。

「あっ」

クロウが小さく声を上げる。

「ああ、何の用だ？ —— シャロン」

ガウストの問いに少女はふんと鼻を鳴らす。

「ガウストにはもういいわ。用があるのは、あんたよ。クロウタス」

初めて会った時のようにびしっと指をさす。自信に満ちたその笑みに、クロウは少しじろぐほかなかった。

「——本当にやるの？」

「勿論。あたしはあんたと勝負したい、それだけよ」

時は少し経って、クロウたちは会場の中庭に移動していた。

話しかけてきた黒髪の少女がクロウに一对一の模擬戦を申し込んできたのだ。

相手に強打、あるいは強めの魔法がヒットした時点で終了というシンプルな内容だったが、正直クロウは乗り気ではなかった。むしろ断ろうとした。戦ったばかりなのにまた戦わなければならないのかと愚痴を零そうとも思った。

しかし、ガウストの言葉でその考えは無に帰す。

『「こいつは俺の弟子さ、お前とどれだけやりあえるか見てみたいもんだ」』

そんなことを言われておいて拒否することは出来そうになかった。弟子ではないと反論すればいいのかとも思ったが、何より相手が好戦的であることが一番問題だった。つまり、師匠であるガウストが望み、片方がやる気満々である以上、断ることは出来なくなっていた。

澁々模擬戦を承諾し、場所を変えるために移動することになった。のだが。

『ガウストは試合でも見てたらしいじゃない。久しぶりでしょ？ ここに来るの』

少女の言葉に従って、ガウストはこの後の試合を観戦するためにクロウたちと別れた。個人的にも他の魔法士たちが気になっていたので、そこは特に咎めなかった。

そして人気のないこの場所にやって来て、今に至る。

「そう言えば、まだ名乗ってなかったわね。あたしはシャール・ロット・クランツ。シャロンでいいわ。ランクは高雷^{エレキレス}魔士の序列三位よ」

「エレキレス？」

「水属性で言ったらあんたの一つ上よ」

「ええ……」

自分よりも高ランクの人が勝負を吹っかけてきた事実^に項垂れなくなる。何故自分なんかに声をかけたのだろう。

顔に出さずに嫌な気持ちを表現する術を割と本気で考えだしたとき、また別の声が聞こえてきた。

「——あ、こんなところにいたんだ。噂は本当だったんだ」

声の方に向き直ると、フェンス越しに少女が立っていた。

透き通るような金髪に碧色の目。噂に聞く金髪碧眼というやつだ。緑を基調とした服に身を包み、丈の長いブーツを履いている。そして胸の方に目が行き——すぐに視線を逸らした。ばれないように逸らした。

「銀髪の君、どこ見てんの？」

「…はっ！ あ、なんかつい」

「タイム……」

タイムもどうやら同じだったようだ。自分と違ってバレたようだが。

「高雷魔士のシャーロットさんでしょ？ こんなところで会えるなんて」

「…確か、水四魔士序列一位のミッシェル・ボスコ、だったかしら」

「元一位ね」

「えっ、水四魔士って」

二人の会話にクロウが思わず声を上げる。

「クロウタスさんだっけ、君が一位になるまでは私が一位だったの。まあ評議会の決定は覆らないから仕方ないんだけど」

そう言つて少し下を見せて苦笑いする。その様子にシャロンとは対照的な、優しい印象を抱いた。

「っていうかシャロンでいいわ。あと、噂って？」

「じゃあ私もミツシエルって呼んで。——水四魔士の一位になった魔法士が勝負を挑まれたって、ちよつとした騒ぎになっててね」

ミツシエルの言葉にクロウは更に項垂れる。

「もう目立ちたくない」

「クロウ……ドンマイ」

ティムが肩に手を置く。何の慰めにもならないが、少しだけ気分が晴れたような気がした。

「せっかくだから私も見学させてもらおうつと。二人とも頑張つてね」

そう言いながらミツシエルはフェンスの上をひらりと飛び越えリルカの隣に腰かけた。あまりに唐突だったが、その鮮やかな動きにリルカが歓声を上げる。

賑やかになった外野の声を聞きながら、クロウは視線をシャロンへと戻した。

シャロンもまたクロウへ視線を送る。その右手には、彼女の魔法具であるらしい指揮棒が握られていた。

クロウも左胸に手を翳し、木蓮の杖を起動させた。

「さあて、始めましょうか」

シャロンの自信に溢れた笑みを静かに見つめ返す。

一陣の風が両者の間を吹き抜けて。

クロウとシャロンは一斉に動き出した。

episode. 6 指揮者

二人が一齐に動き出したのと同時に。

ドゴオオオオオン!! という盛大な爆発音が轟いた。それは会場からではなく、入口の方から聞こえてきた。クロウたちも動きを止め、その方向へ視線を向けた。

「何だ!?!」

「爆発した!?! 爆発したよ今!?!」

「っ!?!」

各々が驚きの声を上げる中、素早く現実に戻ったのはシャロンとミツシエルだった。

「この爆発、場外乱闘ってわけでもなさそうね。何者かがここに攻め入ってきた!?!」

「そうね。でもここからじゃ何も分からないわ。——シャロン」

「勿論」

経験の差故か、いち早く冷静になった二人は対処法を考え出す。

ようやく落ち着いてきたクロウはそんな様子の二人に目を見開く。

「二人共…何で、そんなに冷静でいられるんだ…?」

果然と呟くその言葉は、平和を維持してきた日本で暮らしていたからこそ出てくるもの。

一世代前では戦争を行っていたかもしれないが、現代の若者であるクロウたちには遙かに縁遠く、想像出来ないものだった。

しかし、

「やらなきゃ殺られる。悪いやつが攻めてきてるのよ」

今いる世界は自然豊かな世界であっても、戦いの止まない動乱の世界でもある。

「戦わないでどうするの」

クロウたちが経験したことのない、戦争が続く世界。

それは、恐怖以外の何物でもなかった。

「——それだけの力がありながら戦うことを拒むなんてね。買い被り過ぎだったかしら」

戦意のない彼らを見てシャロンは呟く。

二人を見ると、既に彼女らはこちらを向いていなかった。

と、その時。

「いたぞ！ 例の奴らだ！」

そんな叫び声と共に敵勢と思われる連中が建物の陰から群れを成して現れた。その手には魔法具や剣が握られており、明らかに戦闘態勢に入っていた。

「随分と侵攻が早いわね。これは油断してられないわ」

だが突然のことにもシャロンたちは毅然としている。堂々たる威厳をその背から放ちながら一歩踏み出して、

「待つて」

不意に発せられたリルカの声に足を止めた。

「こいつらは、倒さないとうなるの？」

「…そうね。きつとタダでは済まないわね」

揺るがない視線を向けられたミツシエルが答える。

「つまり、敵前逃亡なんて恥ずかしいことは出来ないってことね」

ぼそりと呟いた次にはリルカはもう動いていた。

一瞬のうちに踏み出したリルカは、勢いを増しながら右拳を強く握り、今まさに走り出そうとしていた男の懐に潜り込んで。

「《一の型・顎あご》！」

捻りを加えた拳が男の顔面を捉え、後ろにいた者たちを巻き込んで大きく吹き飛ん

だ。

奇襲返しをされた敵勢は暫し唾然としたが、すぐに魔法を使用しよう構えを取り始めた。

それを視認するより早く、リルカは両の手を伸ばした。ブレスレット状になったそれに意識を向けると、それはすぐに反応した。

途端両手首から魔力の風が発生したかと思えば、そこには彼女の生魔具《逆鱗》があった。

「《二の型・滝登》！^{たきのぼり}」

流れるような動きで敵に接近すると、魔力を帯びたアツパーを繰り出した。周囲に風が起き、一人に向けられた攻撃は周りの敵を巻き込んだ。

そして、空中で姿勢を変え敵が密集した場所を視界に捉えて拳を振り上げる。

「《三の型・千鳥》!!^{ちどり}」

落下の勢いをそのままに拳を振り下ろす。鳥が鳴くような風切り音と共に、拳は大きく地面を穿った。

「……………すげえ」

一瞬の内に起きたそれらを見たクロウたちは立ち尽くし、唯一タイムの呟きだけが零れた。改めてリルカと喧嘩することの恐怖を感じ取り、二人で身震いする。

「っ……！ き、貴様……！」

「こいつ、滅茶苦茶強えぞ！」

相手も正気に戻つたらしく、漫画に出てくる取り巻きたちが発するようなセリフを言
いながら、リル力を取り囲むように動き出した。

あつ、と声を出す前に隣にいたはずのティムが駆け出し、退路を塞ぎかけた敵を
十字の崩剣で横薙ぎに振り払った。出来掛かっていた壁が情けない悲鳴と共に崩れる。

「ティム！」

「ここは俺たちに任せろ！ それより中の様子を確かめて来い！」

「っ……！」

背を向けながら言い放った言葉に思わず口をつぐむ。言い返そうとしたが、続く言葉
がそれを遮った。

「こうなつたら何だつてしてやろうぜ！ お前だつてそのためにそいつを選んだんだろ
！」

「クロウ、自身持つて！ 大丈夫だよ！」

振り返らず叫ぶ二人の背中をクロウは見つめた。

二人だつてさつきまで恐怖していたはずだ。未知の世界の諍いに巻き込まれて、命を
張れなんて言われて。きつと今だつて嫌だと思つているはずだ。

それなのに、二人は戦おうとしている。

「どうするの。友達は決めたみたいだけど、あんたはこのままでいるの?」
隣に歩み寄ったシャロンがじろりと睨み付ける。

反対側には何も言わず、だが真つ直ぐに見つめるミツシエルが。

この場にいる全員が心を決めている。決まっていなのはクロウただ一人。

（怖い、けど）

クロウが魔法を覚えようと決めたのは、自分自身の我儘のためだ。

守りたい。ただそれだけ。

初めから覚悟は決まっていた。

視線に想いを乗せて、敵に囲まれている二人を見る。

顔は、笑っていた。

「——シャロン、ミツシエル。行こう」

フツとシャロンが笑った、気がした。

「ええ、さっさと片付けて、あんたとの勝負を再開させましょ!」

「ええ……」

一気にやる気が失せるようなことは言わないでくれ。

内心そう思わざるを得なかった。

ポツエ・ドウラスの中は、言うなれば凄惨たるものだった。

観客と参加者でごった返していた中は、逃げ惑う人々と追い立てる者との混乱を極めていた。シャロンたちのようにすぐに切り替えられる者の方が少ないようだった。

「こんだけ派手に暴れてるなら、それなりの目的があるよね。ここは陽動で、本命は別にいるはずよ」

シャロンの冷静な分析が、改めて感じた恐怖を少しづつ落ち着かせていく。どうやらシャロンのことを、どこかで信頼出来ると認識しているようだ。でなければ、こんな気持ちはならない。

「本命を探すにしても、ここで襲われている人たちを放っておくのか？」

「そんな訳ないでしょ。全員助けるわよ」

きつぱりと言ひ放ち、懐に仕舞っていた魔法具を取り出す。視線の先では火炎が一人の観客に襲ひ掛かろうとしていた。

「——《円舞曲》」

指揮者のように構え、魔力を放つ。

指揮棒によつて伝えられたそれは、火炎に触れると動きを止め別の動きを見せた。ぐにやりと変形した炎は数体のドレスを纏つた女性の姿になり、シャロンの周りを踊り始める。

炎を変形させられた魔法士はその光景に驚き、隙を見せる。シャロンはそれを見逃さず、指揮棒を振るつた。

「踊れ！」

炎の貴婦人は魔法士に向かつて突撃し、踊るかのように痛打を打ち込んだ。見た目からは想像出来ないインパクトが発生し、一撃で相手をダウンさせた。纏っている炎によるダメージも付加されているらしく服は焦げ付いている。

「ちっ、くそー！」

すかさず近くにいた水属性の魔法士が魔法を放とうとするが、その前に貴婦人による攻撃に襲われる。

その光景はさながら、舞踏会のように見えた。

「さすが高雷^{エレキレス}魔士のシャーロット。聞いていた通り」

「聞いていた、つて何を？」

クロウの隣で傍観しているミツシエルの言葉に首を傾げた。

「シャロンの魔法は、あらゆる魔法を操るの。操作する魔法を持っている人は他にもいるけど、魔力量が多くないと持続できないし高い威力も出せないくて、蚊の鳴くようなものになっちゃうの」

「だけどあの威力、つてことか」

それは確かに凄いことだ。

そしてそんな人から挑まれるのはやっぱり嫌だと思つてしまふが、取り敢えずその思考は放棄した。

「さて、私たちも援護に入りましょ。一人を消耗させる理由はないわ」

「……了解」

苦笑いにならないように注意しつつ、クロウは左胸のブローチに魔力を集中させながらミツシエルとは反対側に走り出した。

元水四魔士と言うくらいだ、きつとかなりの実力者なのだろう。そう思つて視線を向ける。

すると、意外なことに魔法具を手を持っていなかった。魔法具を通じて魔法を行使するため、手に持つか身に付けていなければ魔法は使えない。

ではどこに、と魔力を高めつつ視線を動かすと。

「始めましよう」

左手を頭の後ろ——団子状に纏めた髪に差ししてある簪に伸ばしていた。鮮やかな緋色の宝飾が輝きながら魔力を湛え、正面に突き出した右手の前で半透明の泡を生み出した。

まるでシャボン玉のように右手から泡を吹き出し、ぽぽぽぽ、とシャロンが戦う場所の上空に飛んでいく。そしてミツシエルはサツと手を振り払いながら叫ぶ。

「しづくツララオ雫・氷柱落トシ」

瞬間泡が破裂と同時に氷結し、無数の氷柱へと変化し敵の頭上に降り注いだ。

突然の攻撃に身を引きかけた敵勢をシャロンが素早く囲い込み、退路を塞ぐ。何の打ち合わせもしていないにも関わらず、見事な連携だ。そして二人の視線が向けられているのを感じながら、自身に《エンハンス強化》。

力強さを増した脚力で一気に距離を詰め、敵の周囲に木蓮の杖の魔法石部分をカンツと付ける。木蓮の杖を通じて地面に残されたクロウの魔力は魔法陣へと変換し、展開される。たちまち四つの魔法陣が円のように描かれた。

「《水流円蓋》！」

水の渦がドーム状に膨れ上がり、敵は水中で互いにぶつかり合い弾けた。

ドサツと地面に伸びた敵を横目で確認しつつ、襲われていた観客に駆け寄った。

「大丈夫？」

「は、はい。ありがとうございます」

助けられた観客の少年は小さく頭を下げると、立ち上がって出口の方に逃げていった。そちらの方では親と思しき女性が手招きしながら少年の名を呼んでいた。

それらを見届ける前に向き直り、小さく被りを振った。

「…さっきの二人の攻撃、近くで見ても凄いと思ったよ」

「そう？　そう言えばどんな魔法かとか話してなかったわね」

共闘するには知るべきと、仕舞いかけていた指揮棒を目の前に出した。

「これがあたしの魔法具《指揮する雫》。あたしの《指揮者》にぴったりでしょ」

そう言つて自慢げに胸を張ってくるが、コンダクターという言葉に首を傾げ聞き返す。

「コンダクターって？」

「あたしの魔法。人の魔法を操れるのよ。人自体は操れないし、あたしより強いやつ魔法も操れないんだけど」

「……成程」

思ったよりも制限のかかる魔法らしい。だがミツシエルも言っていた、制限を気にしないでも良いほどの実力をシャロンは持っている。

だからこそ高雷魔士たるのだろう。

「そういやあんたの魔法のことも聞いてなかったわね」

「見たんじゃないのか」

「見ただけじゃ分からないこともあるのよ。どうせ後で勝負するんだし、あたしも話したんだから言いなさいよ」

「ええ……」

後半についてはそうだね、と頷きたくない。元はと言えばシャロンとガウストが原因で――

「あ」

唐突に出た大きな声に二人はビクリとした。

「そうだ、ガウストのこと忘れてた！ 元魔法士と言っても今は魔法使えないから……どうしよう、逃げてるかな……」

何ともふしだらな人ではあるが恩人であり師でもある。無事を確認するぐらいはしないと、焦りが募ってきたクロウの気は落ち着きそうになかった。

そのせいで、一瞬だけ違ったミッシェルの様子に気付くことはなかった。

「あいつ…あたしも忘れてたわ。まあほつといてもいいと思うけど?」

「それは、だめだ。二人はこの辺にいて。僕はちよつと客席を見てくる」

「え、ちよつ、クロウ!」

呼び止める前に駆け出したクロウの姿はあつという間に小さくなった。

「そんなに心配しなくてもいいと思うけどなあ…」

「……きつと、色々あるんでしよう」

「?」 まあそうね。大概の奴らはクロウ一人でも対処出来そうだし、あたしたちはこころの敵を一掃しちやいませよ」

クロウが消えた角や反対側からまた敵の姿がちらほらと見え始めた。

小さくため息をついた後、それぞれの方向へ向けて走り出した。

一つ目の曲がり角を駆け抜けて、《強化》を発動させた。

階段まで約五十メートルの通路を全速力で走る。

同時に途中にいる敵に魔法陣を放ち、叫ぶ。

「《水戀・練武》！」

流れるような動きで以上のことをやってのけ、止まることなくクロウは振り返らず直進した。

傍から見れば実力者のそれと何ら遜色ない行為を周囲に見せつけていたが、そんなことはどうでも良く。クロウは客席に続く階段を駆け上がった。

以前ならこの時点で息が上がっているが、《強化》しているためその心配もない。他者に付与出来ないのが難点だが、それでもアドバンテージがあるのは確かだ。

薄暗い場内からようやく抜け出し、クロウは目的地に辿り着いた。素早く辺りを見回し状況を確認する。

辺りの様子にクロウは息を飲んだ。

あちこちに抗争した跡が残り、煙が未だ立ち上っている。嫌に媚り付く臭いがどうやっても血を連想させた。

その合間を縫った先に、探し人を見つけた。

「ガウストー！」

クロウの声にぴくりと反応し、こちらに振り返った。遠目では無傷のように見える

が、近付いてみないと何とも言えない。

「おお、クロウ！ 無事だったか！ ティムたちはどうした！」

クロウと同じぐらいの音量で返答が返ってきた。こちらは大丈夫だと言わんばかりに腕をぶんぶん振り回している。

その様子によくやくほつとし、叫び返した。

「襲ってきた人たちと戦ってる！ 僕はガウストの様子を見に来た！」

「悪いな、ちよつと立て込んでよ！ こつちまで来てくれ！」

そう言つて物陰に引つ込んでしまった。

理由を聞く前にいなくなつてしまったので、仕方無しとため息をついてから、丈夫そうな場所を選んでひび割れた客席を渡る。

ガウストが引つ込んだ物陰へと警戒をしつつ近付くと、そこには

「おお！ さっきの水四魔士！ 助けに来てくれたのか！」

「助かったー！」

「怖かったよー！」

逃げ遅れたと思しき人々が数人、身を寄せ合っていた。大人や子供たちがしきりに感謝を告げてくる中、小さな動物を抱いた少女が目に残まった。

他の人とは違う雰囲気をつけており、その違和感が何だか気になった。

「クロウ、中の様子は」

「…あ、シャロンたちがきつと沢山倒してると思う。今なら逃げられるかも知れない」

「よし。オレはこいつらを連れて避難する。お前はシャロンに伝言を頼まれてくれ」

「僕が？」

嫌そうな顔を咄嗟に隠し切れず、ガウストが苦笑いする。

「今のオレは戦えないからな。シャロンなら任せて大丈夫だ——あと、こいつも連れてってくれ」

ガウストは振り返ると、避難者たちに向けて手招きした。

殆どの者がきよとんとしている中、一人が立ち上がってガウストの隣まで歩み出てくる。

それは、先程気になった少女だった。

「オレのお墨付きだ。きつと頼りになる——な？ エルシヤ」

ガウストが自信満々に少女、エルシヤの背中を叩く。

戸惑う様子を見せる彼女は、クロウに向き直りぺこりとお辞儀をした。

「ちよつと怖いけど、頑張ります。よろしく願います、クロウタスさん」

——何だか妙なことになったなあ……。

急展開の現実と新たに加わった少女を見て、そんなことを思うクロウだった。

episode. 7 妖狐使い

小動物を抱えた少女はエルシャ・ニルヴァーナと名乗った。

どうやら彼女も魔法士らしいが、シャロンやミツシエルとは違い自己主張の少ない態度に首を傾げていると、

「わ、私、あんまり自信なくて……。でもガウストさんが私を頼ってきてくれて。クロウタスさんたちがまだ中で戦ってるはずって聞いて、私も出来ることをしようと思ったんです」

少しばかり誇張が入ってる気もしないでもないが、要約すればガウストに励まされたということか。人を見る目はある（はずの）ガウストが認めたのならば彼女も相当強いのだろう。そう思っただけ聞いてみると

「私、昇級演武は今回が初めてなんです」

見当はずれの回答が返ってきた。

「じゃあ、僕らと同じなのか」

「クロウタスさん……たち？ あの大將になった方とかですか？」

「あ、うん。………」

エルシャの言葉に少し眉根を寄せる。

俯き何か考え出したクロウを心配そうにエルシャが覗き込んだ。

「ど、どうかしたんですか?」

「……ん、えつと……。やっぱいいい」

「?」

喉から出かけた言葉を飲み込み、思考を切り替える。視界の奥の方に敵影を捉えたからだ。

ブローチを起動し杖を握り構えるが、エルシャの左手が目の前まで持ち上げられた。

驚き相手の顔を見ると、先程までのおどおどした雰囲気とは打って変わって真剣な趣きが漂っていた。

「クロウタスさんはここまでかなり消耗してますよね。……ちよつと怖いけど、ここは私がやります」

言葉に若干の乱れが見えたものの、それを聞く間もなく腕に抱えていた小動物を降ろした。

何をするのか見当が付かず、仕方なく一步身を引きエルシャに譲った。入れ違うように少し重い足取りで前に立ち、魔力を高め始める。

「行くよ、キュー」

「きゅっ！」

「……え、喋った!？」

エルシャは魔力を小動物と共有し始める。それに惹かれるように小動物が小さな光を放ち始め、その姿をみるみる変化させていく。

足元にあつた小さな姿は、一メートルを超える大狐へと変貌し、クロウの身長より大きくなった。妖しげな炎を纏いながら優美な足取りでエルシャの隣に並び立つ。

「キュー、お願い！」

「きゅきゅー！」

エルシャの声に答え、六つに分かれた尻尾の先から炎を生み出す。キューと呼ばれた妖狐は向かって来る敵に向け炎を放った。

「うわっつ!?! 何だこの炎!」

「くそっ!」

先制された怒りも合わさり、反撃すべく敵も動き出す。だがその前にエルシャも動いていた。

「吠えて—— 《フエイバリーニツク擬態の炎》」

エルシャの魔力が形をとり、キューの炎は燃え盛る大型の狼——言うなればヘルハウンドの姿となり敵に飛びかかった。

突然変化した炎に驚き、敵の陣形に隙が生まれる。それを逃さぬようヘルハウンドで追い立てていく。

「終わりー！」

追い詰められた敵は逃げられず、ヘルハウンドの攻撃によって戦闘不能になった。

おどおどしていた様子とは反対に見事な手際で相手をいなしていた姿に、素直に驚く。

「強い」

「そんなことないです。さっきも緊張しちやつて、火魔法士ファイニイの27位でしたし」

エルシャはふるふると首を横に振り一歩身を引く。どうやら謙遜しているわけでもなさそうだ。何処と無く自分に似ている気もする。

最も、自分を卑下するのは違って彼女のは単に自信がないだけのようなだが。

ともかく、ガウストが認めただけのことはある。これで今起きている事態の解決に一歩近付くことが出来るだろう。

でも、このまま行くわけにもいくまい。一緒に行くのであれば、違和感はなるべく少ない方がいい。

「それでも、エルシャの実力は凄いなと思う。付け焼き刃の僕とは違う。自身を持っている」

「……そう、でしようか」

おずおずと顔を上げる。ほんの少し期待を孕ませた瞳に、少しこそばゆくなりながら答える。

「うん」

一言、シンプルに伝える。

それだけで意図は伝わるだろう。

「……そっか」

「あと、クロウでいい」

「はい、クロウさん！」

ほんわりと柔らかい笑みを浮かべながら頷いた彼女を見て、考えを改める。

やはり自分とは似ていない、と。

入り組んだ通路を抜けていくと、見覚えのある後ろ姿を見つけた。お目当ての人物

だ。

「シャロン！」

クロウの言葉に気付き振り返る。自分より多くの戦闘をしていると思うが、疲れた様子は見られない。

シャロンもクロウの姿を見つけたらしく、こちらに駆け寄ってきた。

「クロウ！ 全く、勝手に走ってくからお陰で見失ってたのよ。ミッシェルと手分けして探してたつてのこのこ出てくるとか…しかも誰か増えてるし」

「え、えつと、エルシャです」

「愚痴はそこまで。ガウストからの伝言がある」

延々と続きそうな言葉を遮り、頼まれていた伝言を手早く伝える。

最初は中断されたことに腹を立てている様子だったが、内容を聞くうちに表情は険しいものとなっていった。

全て話終えると、シャロンは露骨にため息をついた。

「なるほどね…今日は厄日だわ」

「項垂れてるところ悪いけど、簡単に説明してくれないかな。正直…よく分からなかったから」

「…あの、私も…」

魔法士歴数週間のクロウと新人のエルシャには、ガウストから託された伝言の内容はさっぱり分からなかった。ただ聞いたことをそのまま伝えただけでは、現状に太刀打ち出来まい。

後でリルカとティムにも説明しないとイケないのは少々面倒だが。

「……まあいいわ」

常識として知つていいし、とシャロンは言葉を区切る。

「まず、ギルドは分かるわよね？」

「はい。誰でも作れる民間組織で、魔法士や商人たちが集まって作ることが殆どですよ
ね」

「ええ。評議会の監視下には置かれるけど、仕事を見つげやすくなるし、昇級演武での評価にも多少影響してくる」

その他細かいことはあるらしいが、簡単に言えばフリーで活動するより利点の多い、という事だ。そのため大半の魔法士はギルドに加入しているらしい。

ギルドという言葉はガウストから聞いていたし、あの世界でありがちなものと大差ないように思えた。

「シャロンもどこかのギルドに入っているのか？」

「いいえ。何度か検討したけどフリーでやってるわ。仕事がないわけでもないしね」

「凄いです」

恐らくシャロンほどの実力があればこそその決断なのだろう。

「少し話が逸れたわね。で、そのギルドにも色々な種類があるの。普通はさつき言つてたような魔法士とかのね」

でも、と言葉を区切る。声のトーンが少し下がったことに気付いた。

「中には悪行の限りを尽くす奴らのギルドもある。評議会の管理を無視し、非人道的な行為を繰り返す——《闇ギルド》ってのがね」

「闇ギルド……」

意識を向けなくても苦い顔をしているのが自分で分かった。

(どこにでもいるんだ……)

クロウの人生を変えたあの人たちを、悪人だ、とは言わない。

正しいとも思わない。

人の気持ちを簡単に捻じ曲げて狂わせる人は、思い付く中で一番嫌いな人種だ。きつと誰だって同じだろう。

正義の味方ぶるつもりはないが、無視したくもない気持ちが湧いてくる。今の自分なら遭遇しても対処出来るだろうから——

そこまで考えて、思い至った。今回の襲撃について。

横を見ると、エルシャも気付いたようで「あつ」と声を出した。

「じゃあもしかして、この襲撃もその闇ギルドの仕業なんですか？」

「恐らくね。——確認しましょうか」

シャロンはおもむろに足元に転がっていた敵の懐を探る。そう時間を掛けずに手は引き戻され、突っ込む前には持つていかなかったものを差し出した。

「メダル……？」

硬貨のような薄い金属の円盤に、見たことのない意匠が描かれている。その絵はトゲや鎧のようなものを纏った蛇のように見えた。

シャロンの顔を見やると、明らかに苦い顔をしていた。どうやら、意味するものを知っているらしい。

「闇ギルド《大蛇の鎧》スネークメイル——それが今回の襲撃者よ」

「はあ、はあ…。だいぶやつつけたよね」

肩で息をしながらリルカが周囲に目を向ける。手傷を負ってはいないが、数十人を相手取った疲労感はその簡単に抜けるものではない。

空手で鍛えていたとしても、命のやり取りをするために鍛えていたわけではないのだ。

それでも何とか敵の侵入を防ぎ、クロウたちに合流するためボツエ・ドウラス内の探索を始めた。しかし、クロウどころかシャロンやミツシエルの姿も見つけられないでいた。

「襲ってくる奴らの数も減ってきてるし、もうちよいな気がするけどな。ここ広過ぎんだよ……」

リルカと並び周囲を見回すティム。

同じく怪我はしていないが、疲労は免れない。そんな状態で国中の人々が集まる闘技場を歩き回ることもただけでもかなりハードだ。

「いつそ呼んだら出てこないかなー」

「やってみれば」

大声を出せば敵も寄ってくるかもしれない、なんてことを考えるのも面倒になつてくる。

「そうだねー、と適当に返して、実行に移す。」

「おーい、クロウー！ シャロンー！ ミツシエルー？」

「……………でも、来るわけ」

「あら、誰かと思えば二人とも」

「来た!」

少し離れた角からひよっこりとミツシエルが顔を出した。

本当に出てくるとは思ってなかった二人は軽くフリーズしてしまう。

「何とかなつたのね。無事そうでよかった……生きてる？」

「……………はっ。生きてる生きてる。みんな見つからないから困ってたんだよ」

「あれ、そういやクロウたちは一緒にやらないのか？」

ようやく頭が正常に回ってきたようだ。別れたときはいたはずの友人と知り合いがないことに気付く。

「ちよつと別行動してたの。この辺の敵は倒したし、これから合流するつもり」

「居場所は分かるの？」

「大丈夫よ」

さあ、と促され二人はミツシエルの後について行く。仲間が一人増えただけでとても心強かった。

入り組んだ通路を暫く歩くと、少し広めの回廊に出た。規則的に柱が並び、太陽の光が差し込んでいる。

その内の一本の近くにクロウたちの姿を発見した。

「おーい！ 無事ー？」

クロウを見た途端に、さつきまで感じていた疲労がすうつと抜けた。そんなことには気付かずリルカはクロウに駆け寄った。

「無事。そっちも大丈夫だね」

「勿論！ 任せてって言ったでしょ」

どん、と胸を叩いて見せる。少し沈んでいたように見えた表情が、仄かに安心したようになった。

クロウの気持ちに気付きリルカも安心したとき、ふと横から物凄い視線を感じた。振り向くと、小狐のような生き物を抱えた少女が、まじまじとこちらを凝視していた。

「……誰だ、クロウ」

タイムが問いかける。かなり訝しげな表情をしているが、クロウは特に気にした様子

もなかったようだ。

「一緒に戦ってくれるって。ガウストから推薦された子」

「エ、エルシャ・ニルヴァーナです！ よろしくお願ひしみます！」

思いつきり囁んだ少女が途端哀れに思えた。

「リルカの試合見てたんだって。凄かったって」

クロウの言葉にティムはなるほど、と頷いた。

「つまり、凄く怖かったんだな！」

「どういふことよ！」

「グホオ…!？」

素早く腰を落としてボディブローをぶちかまし黙らせる。クリーンヒットしたティムは白目を剥いて床に蹲った。当然の報いである。

「……かつこよかった、ってさ（ぶるぶる）」

「何で震えてるの。ふーん、でもまあ、悪い気はしないね。ありがとう！」

すつと差し出した右手にエルシャは少し驚く。

おずおずと自分も右手を差し出し握手に応じると、花が咲いたように笑顔になった。

「よろしくね、エルシャ！」

「はい、よろしくお願ひします。リルカさん」

「うっ…ぐ…ふっ」

「挨拶はそこまででいいかしら」

何となく会話がまとまったところで、シャロンが別の会話を切り出した。

張り詰めた緊張感が漂い、緩んでいた気持ちを引き締め直す。

「集まったことだし、早速作戦を話すわ。——今回の敵、《大蛇の鎧》を倒すために」